

坂町キッズ起業家育成塾の15年

松尾俊彦

15years of Kids Entrepreneurship Training Lessons at SAKA

Toshihiko MATSUO

This study analyzed the records and contents of Sakamachi's "Kids Entrepreneurship Training Lessons (the Kids Seminar)" for 15 years, 25 times. The purpose, outline and results of the Kids Seminar were summarized, and the growth of participating children was considered. We studied in a 4-day the kids seminar with elementary school students in Sakamachi. In a 3-day is the learning sessions and a 1-day is the sales events. The Kids Seminar was jointly held by Sakamachi, Sakamachi Board of Education and Hiroshima Bunka Gakuen University. We thought that focusing on studying the idea born of the learning knowledge and the experience knowledge, the spirit of challenge by the experiential learning as the career Education. We have had great consequences for our children's growth in the Kids Seminar.

Key word (キーワード)

Kids Entrepreneurship Training Lessons (キッズセミナー), Experiential learning (体験型学習), Career education (キャリア教育), Learning knowledge (知識(学習)知), Experience knowledge (経験知)

はじめに

昨今の急速なグローバル化, 少子高齢化や人口減少が社会問題となり, 社会環境・構造の変化が指摘されてきた。また, 製造業を中心にしたモノづくりは, わが国よりも労働単価の安い国にシフトし世界の工場としての役割を果たすようになり, わが国は技術立国として先端, 先進技術の開発競争に直面している。これまでの重厚長大なモノづくり・大量生産の時代においては, ルーティン・ワークのもと早く正確に大量生産すること求められてきた。しかし, ICTやAIの普及, 発展により, 産業界にはこれまでの知識偏重の紋切り型の詰め込み教育では革新的な発明や技術は生み出

せないという危機感が広がった。同様に教育界においても, 時代の変化や社会のニーズに応じた人材育成を求められている以上, 子どもたちが将来を生き抜く上で必要となる力が変わってきたことを受け, 教育の質的転換が求められるようになった。

教育の質的転換の流れの中では, 学修者が受け身ではなく自らが能動的に学ぶアクティブ・ラーニングによる教授, 学習法の実践に関心が高まってきた。もともとアクティブ・ラーニングは, 平成24年8月の中央教育審議会(以下, 中教審という)「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け, 主体的に考える力を育成する大学へ～(答申)」¹⁾の中で提言されたも

* 広島文化学園大学 社会情報学部 (Faculty of Social information Science, Hiroshima Bunka Gakuen University)

ので、「生涯にわたって学び続ける力、主体的に考える力を持った人材は、学生からみて受動的な教育の場では育成することができない。従来のような知識の伝達・注入を中心とした授業から、教員と学生が意思疎通を図りつつ、一緒になって切磋琢磨し、相互に刺激を与えながら知的に成長する場を創り、学生が主体的に問題を発見し解を見いだしていく能動的学修（アクティブ・ラーニング）への転換が必要である」と記され、当初は大学教育の在り方についての議論が目的であった。同答申用語集の中で、アクティブ・ラーニングは「教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称」と説明され、主に大学の大学大教室で行われているマス講義の質的転換を図るためのものと考えられ、認知的、倫理的、社会的な能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を目的としていた。具体的な学び方として、発見学習や問題解決学習、体験学習、調査学習、グループディスカッション、ディベート、グループワーク等が挙げられている。

さらに、平成26年12月の中教審「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について～すべての若者が夢や目標を芽吹かせ、未来に花開かせるために～（答申）」²⁾では、高等学校の教育課程においてもアクティブ・ラーニングが言及されることになった。そして、平成29年に改訂された学習指導要領³⁾では、「主体的・対話的で深い学び」という表現で、小・中学校でもアクティブ・ラーニングによる授業改善の取り組みを行うことが明記された。こうして小・中・高・大学といったいずれの教育機関においても、認知的、倫理的、社会的な能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図ることを目的とし、発見学習、問題解決学習や体験学習などの学修者中心の能動的な学び（体験型学習）としてアクティブ・ラーニングが導入されることになった。

坂町では平成20年代半ばの中教審答申にあるアクティブ・ラーニング、いわゆる学修者中心の能動的な学び（体験型学習）に先駆け、平成11年12

月の中教審「初等中等教育と高等教育との接続の改善について（答申）」⁴⁾に記されている「キャリア教育（望ましい職業観・勤労観及び職業に関する知識や技能を身に付けさせるとともに、自己の個性を理解し、主体的に進路を選択する能力・態度を育てる教育）を小学校段階から発達段階に応じて実施する必要がある」をもとに、平成16年から坂町商工会（現 広島安芸商工会坂支所、以下、商工会という）を中心に、町内にある三つの小学校の5・6年生を対象にした体験型職業学習として「坂町キッズ起業家育成」を開催してきた。

1. 「坂町キッズ起業家育成」の誕生

「坂町キッズ起業家育成（以下、「キッズセミナー」という）」を始めるきっかけは、平成16年4月初めの商工会の経営指導員であった奥村富士夫さん（現 坂町町会議員）と坂町商工会青年部長・坂町地域振興活性化事業運営委員会委員長であった木村雄一さん（有限会社キムラ社長）との雑談のなかの「地域、学校、家庭が連携して子どもたちを育てたい。その中から、家業、地域の後継者が育ってくれば。何か体験的な学習ができないか。」という言葉であった。

近年、核家族化や住宅事情、都市化、少子化、高齢化等により、住居と働き場（店舗、工場等）が一つ屋根の下にあることが少なくなり、子どもたちが祖父母や両親の背中を見て商売、家事の厳しさを知ることが出来なくなった。また、祖父母から地域の旧き良き習慣や生活の知恵を習うことも少なくなってきた。こうした時代であればこそ、地域、学校、家庭が連携して、子どもたちに伝えるべきものがあるのではないかと考え、当時の坂町地域振興活性化事業運営委員会が中心になり、キャリア教育の一環としていわゆる体験型職業学習、「キッズセミナー」を企画、準備した。

平成16年10月に第1回目の「キッズセミナー」を開催後、毎年11～12月と2～3月の時期に年2回開催し、10年を重ね平成26年3月に第20回目を迎えた。平成27年からは2～3月の時期に年1回開催として本年第25回目を迎えることとなっ

た。この間参加した小学生の数は712人に達した。なお、参加数の詳細は後掲の表を参照のこと⁵⁾。

(1) 時代の要請

平成5年ころから始まった地球規模の情報技術革新に起因する社会経済・産業環境の国際化は、わが国の産業界に大きな構造的変革をもたらした。教育界では、キャリア教育(望ましい職業観・勤労観及び職業に関する知識や技能を身につけさせるとともに、自己の個性を理解し、主体的に進路を選択する能力・態度を育てる教育)の重要性が強く言われるようになった。キャリア教育においては、子供たちの「生きる力」や「働くこと」を育む教育の推進のため、先述した平成11年12月中教審答申では「キャリア教育を・・・小学校段階から発達段階に応じて実施する必要がある」と記され、「キャリア教育の実施に当たっては家庭・地域と連携し、体験的な学習を重視する」ことが提言された。文部科学大臣、厚生労働大臣、経済産業大臣、経済財政政策担当大臣の4閣僚と関係省庁による「若者自立・挑戦戦略会議」が、平成15年6月に「若者自立・挑戦プラン」⁶⁾を策定し、目指すべき社会として「若者が自らの可能性を高め、挑戦し、活躍できる夢のある社会」と「生涯にわたり自立的な能力向上・発揮ができ、やり直しがきく社会」を示した。キャリア教育は、政府、地方自治体、教育界と産業界が一体となって取り組み、わが国の重要な施策の一つに位置付けられた。

文部科学省と中教審は、一連の教育改革の重要な柱として「生きる力」、「職業観・勤労観」の涵養を挙げ、家庭、地域、学校が連携して体験的な学習を中心にしたキャリア教育の展開をめざした。こうした動き、要請に応え、産業界では平成12年に設立された大学発のベンチャー企業⁷⁾が、就学者を対象にした起業家教育プログラムを開発、展開し、各地で起業家教育セミナーを開催した。また、平成16年9月には実際の2/3の子どもサイズで作られた本格的な設備や道具を使って、子どもたちが大人のようにいろいろな仕事やサービスを体験できる体験型職業テーマパーク

「キッズニア東京」⁸⁾が江東区豊洲にオープンした。さらに各地の商業高校では、〇〇商業デパートや販売体験会等が実施され、「生きる力」、「職業観・勤労観」を涵養する「キャリア教育」を目的とした体験型学習への取り組みが始まった。

坂町では、商工会を中心に小学生から職業観・勤労観および職業に関する知識や技能を身につけることができる体験型職業学習として「キッズセミナー」を企画し、平成16年5月から坂町商工会、坂町教育委員会や呉大学(現 広島文化学園大学、以下大学という)を中心にした関係者により検討を重ね準備を進めた。この体験型職業学習としての「キッズセミナー」は、今日教育界で注目されるアクティブ・ラーニング-学修者の能動的学び-における体験型学習の一つの形として、当時としては先進的な取り組みであったと言えよう。

(2) 地元の期待

広島市と呉市に挟まれ海、山の自然に恵まれた坂町は、大規模開発と無縁の感があり転入・転出による人口移動もほとんどなくある意味安定しており、平成11年からの「平成の大合併」による市町村合併においても単独町制を貫いた。しかし、平成10年代半ばから町内への相次ぐ大型店舗の出店により地元小規模事業者は衰退し、また後継者不足も拍車をかけ店舗の閉鎖が続いた。他方、大型店舗の出店により来町者数や大型店舗での就業機会は持ち直し、かつての危機的な状況から脱しつつあった。

住民の高齢化が進み、相続等の問題や都市計画の関係から町内に高層マンションが建設され、町外からの転入者も増え始めた。このことは坂町の活性化にはつながるが、住民の核家族化に拍車をかけ、土着的な住民の数は減少し、店舗兼住居や三世代以上の同居は少なくなり、両親や祖父母の背中から学ぶ古き良き習慣は薄れていった。また、ゲーム機やインターネットの普及により他人と触れ合うことが減り子どもたちの遊び方にも変化があり、外を走り回るアクティブな子どもが減った。そんななか商工会は、独創性とチャレンジ精神旺盛な人材を育成し地域の活性化につなげるこ

とを目的に、平成16年に経済産業省補助事業「地域振興活性化事業」の一環として地元の小学生を対象にした「キッズセミナー」を企画、実施した。

坂町には、小学校、中学校、高等学校と大学が在り、起業家体験に必要な企業経営、会計、商業に関して言えば、人的資源－大学（社会情報学部）には経営、会計、商業分野の専門教育が出来る教員と専門教育を受けた学生－があり、また物的環境－商工会が町内の商業施設「パルティフジ坂」で毎月1回の日曜日である「さかサンデーマーケット」－を開催している。このサンデーマーケットに参加することで販売の場所を確保し、「キッズセミナー」の販売会を実施することにした。多くの地域では、高等教育機関（人的資源）が支援し学習会はできても販売会を実施できる場所（物的環境）が無く、子ども向けの「キャリア教育」である体験型職業学習、例えば「キッズセミナー」に関心はあるが踏み出せない状況であった。坂町のように人的資源と物的環境を合わせ持つ地域は少なく、これらを出し合い連携することにより坂町であればこそ子どもたちへのキャリア教育としての体験型職業学習を実施することができた。

〈補足〉

2年目の平成17年度は、中国経済産業局から「創業意識喚起活動事業（地域活性化事業）」に採択され委託事業として開催し、関係各方面から注目されTV、新聞等の取材もあった。

2. 「キッズセミナー」の概要

(1) 開催にあたって

「キッズセミナー」の内容等は後述するが、30名前後の参加小学生を5～6名のグループ(店舗)に分け、1グループに1～2名の補助者を付け、グループごとに1店舗を運営する形式をとった。講師は大学教員が、補助者は大学生が当たることにした。

学習会は、大学キャンパスを会場にし、働くこととお金の大切さ、事業計画（ビジネスプラン）書の立て方・書き方、商品の仕入れ、販売方法等の知識や技能、接客マナーや決算の方法等につい

て学び、小学生自身が模擬的に実践した。各店舗が販売する商品は、事前に商工会がサンプルを準備し、学習会の中で店舗ごとに小学生が販売する商品を選び、数量を決めた。商品の購入代金と釣銭用の小銭は、商工会が立て替えて準備し各店舗が借りる形をとり、当日の売り上げから返済を受けることにし、各店舗と商工会が模擬借入契約書を交わした。販売会での販売促進のため、立て看板とチラシを作成し、仕入れた商品を売り切るための戦略を立てた。

販売会は、サンデーマーケットの会場で行い、商品の陳列、販売、接客、決算等について実践、体験した。

(2) 「キッズセミナー」の目的

「キッズセミナー」の目的として「キッズセミナー」の募集案内には、

- ①子どもたちの経済教育事業により、商売の大切さを認識させる
- ②子どもたちの自立心を養い、チャレンジ精神を育てる
- ③子どもたちの将来の起業家、事業後継者の育成
- ④地域・学校・家庭の連携事業

が書かれており、子どもたちの学びに中で次の4項目①働くこととお金の大切さ、②経済社会（商業のしくみ）の理解、③商品販売の体験、④自立心、チャレンジ精神の涵養を挙げ、その理解、実践を意識した構成にしてきた。

「キッズセミナー」を始めた当時は、教育現場へお金を持ち込むことは様々なトラブルの原因になること恐れがあるためタブー視する傾向があった。そのため、子どもたちはお金の扱いに慣れてなく数えることさえぎこちなかったが、「キッズセミナー」に繰り返し参加する子どもたち（以下、リピーターという）を中心にお金の管理や効率的な数え方を覚えることにより、いい意味でお金の取り扱いに慣れ、また働きに対する評価としてのお金（労働対価としての給料）の大切さを理解することができた。

経済社会の理解においては、商品の値段の決め

方、店舗での利益の生み出し方について「安く仕入れ高く売る」商売の鉄則やチェーン店のスケール・メリット（大規模店では3割引、5割引のバーゲンセールをしても商業者には儲け（利益）があること等）を理解し、賢い消費者になるための知識を学ぶことにした。

商品販売の体験においては、接客に慣れることを目的にお辞儀、ていねい語の使い方等の接客マナーの練習を取り入れた。また、店舗のディスプレイや商品の並べ方についても、町内の商業施設を見学したり、インターネットで情報を収集したりして工夫することを意識づけることに努めた。その結果、テーブルクロス、モール、オブジェ等ディスプレイのための小道具の準備や着衣の統一を子どもたち自身が考え、各種イベントに出店する店舗と見違えるレベルに達した。これらは、インターネットの普及、拡大の影響が大きいと感じた。

自立心、チャレンジ精神の涵養においては、言われて（指示されて）動くのではなく自分たちで考え行動できるよう、考えていることを言葉や文字で表現するを必須にした。文字にするときは、大きめの付箋紙に考えを書き机の真ん中に貼りつけ、店舗のメンバー全員が見えるようにした。このようにして、自分にもできるというチャレンジ精神の面白さを気づかせる工夫をした。

(3) 「キッズセミナー」の内容

・学習会1日目

開講式後に始まる学習会は、店舗分けから始まる。仲のいい友達と塊になって（まとまって）動きたがる傾向にあり、5～6名ずつにきっちり分けることは困難を極める作業である。店舗分けが決まると、色違いのストラップを使い名札を首から下げ、店舗のメンバー（従業員）を確認しやすくする。店舗の構成員には①店長、②企画担当、③営業担当、④宣伝担当、⑤総務担当、⑥会計担当の役割を割り振り、「キッズセミナー」内での責任を明確にする。

販売する商品は、商工会が準備した坂町および近隣商工会の名産品、特産品のサンプルを手に取り

り、販売方法を考えながら店舗ごとに希望を出し合い、調整のうえ店舗ごとの販売商品を決め、同時に店名についても考える。

・学習会2日目

店舗ごとに決まった販売商品について、当日の天候予測、来場客数の予測等を考慮し、どれくらいの数量が売れそうか販売計画、利益計画を考え、これをベースに事業計画書（ビジネスプラン）を検討する。販売する商品については、商品の理解と流通経路における商品価額、製造時の値段（製造原価）から消費者が買う値段（小売価額）と販売利益について学ぶ。また、お客さんへの対応に慣れるため、言葉使いやお辞儀の仕方など接客マナーについても体験し学ぶ。なお、販売計画や利益計画、事業計画書の作成といった専門的な内容については、大学で経営管理や企業会計を学んだ大学生がサポートしながら進める。

・学習会3日目

販売計画に基づく販売商品の数量について、予定した時間内に完売できるかどうか、数量に無理がないか慎重に再検討する。販売数量が決まると、店舗ごとに事業計画書（ビジネスプラン）と商品購入代金と釣銭用の小銭代金などの経費を商工会から借り入れる模擬契約書を作成する。事業内容や販売計画に無理がないか、実施に無理がないか商工会職員にチェックを受け合格した店舗から学習会の最終工程であるチラシ、看板の作成に入る。

チラシは、「キッズセミナー」の参加店舗であることを記載した専用紙を使い作成した。看板は、販売会で商品を並べたテーブルの前に立て掛けるためのもので、90cm四方のプラスチックボードに紙を貼り手書きで作成する。

平成14年の学習指導要領の改訂により小中学校でも情報教育が正課のカリキュラムとして始まり、子どもたちのパソコン（以下PCという）に対する関心は高く、情報教育設備を有する大学キャンパスを使うことでPCを使ったチラシの作成を考えた。当初はPCの操作に不慣れな子どももおり、大学生を指導役につけ効果的な文字の配列、画像の活用方法等をサポートしたが、回を重ねるごとにPCの操作能力はブラインドタッチが

できるものや大学生を超える子どももではじめ情報教育の拡がりを感じた。なお、最初の頃はPCを使ってチラシ作りをしたが、凝った装飾等のテクニカルな作業に時間がかかり過ぎるため、5回目からは手作業によりチラシ作りに切り替えた。

・販売会

販売会はサンデーマーケットの会場でを行い、商品の陳列、販売、接客等について実践、体験する。販売会は、3日間の学習会で学び、理解したことをすべて出し切り、用意した商品が予定した時間内に売り切れるよう販売方法を工夫する。お客さんの満足を最大にするため、例えば挨拶、お辞儀、話し方、店舗周りの美化等を考えながら、各自の役割の遂行と全員が協力する意識を持つことを実践する。また、商品の陳列方法等、お客さんの関心を引く工夫についても、店舗ごとに検討する。

予定した時間がくると、会場の片づけをした後大学に戻り、売上等のお金の計算（決算）を行い、決算書を作成する。まず店舗ごとに商工会から借り入れた商品購入代金と釣銭用の小銭合計金額を返済し、経費等を差し引き店舗ごとの最終利益を計算する。

・修了式

最終利益を店舗の従業員数（子供の数）で割った金額を一人あたりの4日間の給料として、特製の給料袋に入れ修了証とともに一人ひとりに手渡し、4日間の「キッズセミナー」を終える。

3. 参加する子どもたちの変化

15年にわたり合計25回の「キッズセミナー」を開催してきたなかで、子どもたちの様子に少しずつ変化が起ったように感じる。

核家族化等により祖父母から学ぶ「習慣や伝統から生まれる知識（学習）知」を得る機会が少なくなり、動きたくてもどう動けばよいか分からず、結果として指示を待つことが多くなり「指示待ち族」という言葉が生まれた。ところが、こちらから具体的な指示をしないと動かなかった子どもたちが、ヒントを与えることで状況に応じ自分の考えを表現し、動こうとするようになってきた。そ

の要因の一つとして考えられるのは、PCはじめのIT機器やインターネットの普及、拡大により、多くのデジタル情報に繰り返し触れることが可能になり、「知識（学習）知」を高めることが容易になったことがある。紙ベースのアナログ情報では、持ち合わせる量には限界があり、多くの場合必要な情報を短時間に探し出すことは難しく、繰り返し確認して「知識（学習）知」を高めようとしても限界がある。しかし、インターネットを介したデジタル情報を活用すれば、持ち合わせる量は無限大に拡がり、必要な情報を探す検索時間は短縮され、「知識（学習）知」は格段に拡がり、高まる。これまで指示されるまで動かなかったのではなく、「知識（学習）知」の持ち合わせが少なく動けなかつた子どもたちが、デジタル情報の拡がりにより短時間に「知識（学習）知」の量を増やすことが可能になり、豊富に持つ「知識（学習）知」の引き出しの中から動くヒントを自分自身で見つけることができるようになったと感じる。

また、時代の要請や教育改革等により、体験型学習（アクティブ・ラーニング）が取り入れられ、経験から学ぶ「経験知」を高める機会が増えた。「キッズセミナー」もその一つと考えられよう。リピーターは、回を重ねるごとにチラシ、看板の作成、商品のディスプレイ等の販売方法がレベルアップし、「経験知」から生まれる学習効果は大きいと感じる。一つの例として、看板作りが、紙に文字やイラストを描くといった平面での作業から、段ボールのように厚みのある素材に描いた文字やイラストを切り抜き数枚張り合わせることで、文字やイラストを立体化させるという作業に拡がってきた。また、家にあった残り布を使い、看板にストーリー性を持たせ立体的に見せる工夫をしたグループもあった。これらは、「解らないから動けない⇒解っているが動かない⇒経験したことがあるから動ける」に考え方が変化し、子どもたちの能動的な行動を感じた。

商品のディスプレイをみても、大型店舗が身近なところに出店したことにより、様々なデザイン、アイデアを見る機会が増え、まさに視覚的な「経験知」を高めているように感じる。また、インター

ネットによる影響も大きく、世界中のトレンド、話題を坂町に居ながら見て知ることができ、大きな刺激を受けている。

4. 「キッズセミナー」を終えて

最後に、15年前の第1回「キッズセミナー」を終えて作成した報告書の「まとめ」に、次のような記述を残しているので紹介する。

- ①子どもたちが社会への理解を深めていくために、「生きる力」、「働くことの大切さ」、「職業意識」や「経済社会のしくみ」について理解することに重きを置き取り組んだ。「キッズセミナー」を実施するに当たり、参加者募集要項の「趣旨」にある「経済社会のしくみ」の学習を徹底させるため、販売する商品を自作品やリサイクル品ではなく、卸売業者から仕入れた商品（原価の明確な商品）に限定した。これは、「安く仕入れ高く売る」ことにより利益を得るが、利益を優先するとお客さんが離れていくことなど、経済社会の理解を目的とした。
- ②PCでのチラシ作成において、小学生がキーボード、マウスに臆することなく、かつローマ字（あるいはひらがな）入力による文章作成（なかにはブラインドタッチをする子どももいる）は、総合的な学習の授業等でPCを利用しているとはいえ、時代の流れを感じた。小学校・中学校・高等学校において情報教育を受け、特に高等学校において普通教科科目としての「情報」を学んだ子どもたちが将来入学してくる大学として「何をすべきか」考えさせられた。
- ③多感な年代であり、内向的な子どもたちが多いため照れや人みしり等のため一般のお客さまに対する接客に不安を持っていたが、いざ「キッズセミナー」をはじめると子どもたちが大きな声をお客さんと呼び込み、商品を手を持って会場内を売り歩く姿やチラシを手渡す積極的な姿に驚かされた。
- ④ゲーム機等で遊ぶ子どもが増え他人との触れ

合いが少ないが、子どもたちは一般のお客さんへの販売でコミュニケーションの取り方、挨拶が重要であることを体験することができた。

- ⑤体験の中から生まれる「瞬時（とっさ）の判断」と経験から生まれる「経験知」、学習効果から生まれる「知識（学習）知」の修得は、「キッズセミナー」の隠されたもう一つのテーマであった。時間の経過とともに販売・接客にスムーズな対応がとれるようになり、「経験」と「学習」から「工夫」が生まれ、多くの子どもたちが「キッズセミナー」を楽しかったと感じてくれたことから、めざすところの目的は達成できた。
- ⑥「キッズセミナー」の目的の「④地域・学校・家庭の連携事業」は、『経験知』を増やし学習効果を高めるために地域と学校が連携して子どもたちを育てる仕組みを作ることが重要であることを強く認識した。

5. おわりに

時代の要請として、子どもたちの「生きる力」や「働くこと」を育むため「キャリア教育」を実践するとき、家庭、地域が連携した体験型学習が重要であると教育界、産業界で強く言われてきた。こうした考えに依って、坂町では平成16年から商工会、教育委員会と大学が連携して「キッズセミナー」を実施してきた。これまでの25回の積み重ねは、「キャリア教育」の実践はもちろんのこと、その中で子どもたちが「知識（学習）知」のみならず多くの「経験知」も蓄積することができ、地域が子どもを育てる仕組み作りができてきたように感じる。

人口の減少に伴い社会全体に停滞感が広がるなか、「キッズセミナー」のような産業、教育、行政と地域が連携した体験型学習の取り組みは、成長した子どもたちがやがて坂町の次の世代へ良き坂町を継承することになり、坂町の活性化につながると思う。「キッズセミナー」は、三世代同居の復活というような社会環境、構造を変えるほ

どの大きな力はないが、反復学習から得る「知識(学習)知」の修得という偏った学修から、「知識(学習)知」に「経験知」を加えた「知」の量を増やすという総合的な学びにつながったことを確認することができ、その目的を達成したと言えよう。

最後に、「キッズセミナー」を継続するに当たり、苦勞を惜しまず協力してくださった商工会、坂町教育員会をはじめ関係者各位に深く感謝申し上げます。

引用・参考文献

- 1) 中央教育審議会（文部科学省）平成24年8月28日
「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）」
- 2) 中央教育審議会（文部科学省）平成26年12月

22日

「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について～すべての若者が夢や目標を芽吹かせ、未来に花開かせるために～（答申）」

- 3) 平成29、30年改訂 文部科学省学習指導要領「生きる力」

《参考》

「新しい学習指導要領の考え方－中央教育審議会における議論から改訂そして実施へ－」（平成29年9月28日）

- 4) 中央教育審議会（文部科学省）平成11年12月16日
「初等中等教育と高等教育との接続の改善について（答申）」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/old_chukyo/old_chukyo_index/toushin/attach/1309755.htm

5) これまでの参加者数

開催年度	回数・開催時期	参加人数				
		5年男子	5年女子	6年男子	6年女子	合計
平成16年度	①10/23～11/21（3日間）	0	0	8	7	15
	② 2/26～3/20（4日間）	3	6	13	19	41
平成17年度	③10/29～11/20（4日間）	9	16	4	2	31
	④ 2/25～3/19（4日間）	13	23	4	0	40
平成18年度	⑤10/28～11/19（4日間）	4	1	12	11	28
	⑥ 2/24～3/18（4日間）	7	6	8	9	30
平成19年度	⑦10/27～11/18（4日間）	0	2	11	11	24
	⑧ 2/24～3/16（4日間）	1	6	17	9	33
平成20年度	⑨11/30～12/21（4日間）	7	11	2	9	29
	⑩ 2/22～3/15（4日間）	12	8	10	7	37
平成21年度	⑪11/28～12/20（4日間）	7	11	10	9	37
	⑫ 2/27～3/21（4日間）	12	6	4	0	22
平成22年度	⑬11/28～12/19（4日間）	3	13	11	1	28
	⑭ 2/26～3/20（4日間）	6	3	3	11	23
平成23年度	⑮11/26～12/18（4日間）	3	19	6	1	29
	⑯ 2/25～3/18（4日間）	4	29	6	2	41
平成24年度	⑰11/25～12/16（4日間）	4	7	1	14	26
	⑱ 2/23～3/17（4日間）	0	0	9	20	29
平成25年度	⑲11/16～12/15（4日間）	7	9	4	19	39
	⑳ 2/22～3/16（4日間）	5	18	10	9	42
平成26年度	㉑ 2/21～3/15（4日間）	5	9	4	11	29
平成27年度	㉒ 2/27～3/20（4日間）	2	15	2	8	27
平成28年度	㉓ 2/18～3/19（4日間）	2	9	0	4	15
平成29年度	㉔ 1/27～2/18（4日間）	0	1	0	9	10
平成30年度	㉕ 2/16～3/17（4日間）	3	4	0	0	7
	合計	119	232	159	202	712

6) 若者自立・挑戦戦略会議（経済産業省）平成
15年6月10日

「若者自立・挑戦プラン」2. 目指すべき方向
[http://www.meti.go.jp/topic/downloadfiles/
e40423bj1.pdf](http://www.meti.go.jp/topic/downloadfiles/e40423bj1.pdf)

【参考】

文部科学省

「若者自立・挑戦プラン」（キャリア教育総合計
画）の推進

[http://www.mext.go.jp/a_menu/ikusei/wakamono/
リーフレット「キャリア教育の推進に向けて－
児童生徒一人一人の勤労観，職業観を育てるた](http://www.mext.go.jp/a_menu/ikusei/wakamono/)

めに－」

[http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/career/
04111901.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/career/04111901.htm)

7) 株式会社セルフウイング（早稲田大学発ベン
チャーの株式会社）

<http://www.selfwing.com/>

8) キッズニア東京

<https://www.kidzania.jp/tokyo/>

平成21年3月，日本国内における2店舗目とな
る「キッズニア甲子園」が西宮市甲子園にオー
プンした。